

## 毛利元就出陣と須々万沼城の落城

——主として鉄砲の使用について——

會員 小林省三

はじめに

弘治三年（一五五七）二月二十八日、毛利元就は須々万沼城攻略のため岩国永興寺を出陣した。

天文二四年（一五五五）一〇月朔日、敵島合戦に勝

利した毛利軍が、一〇月七日に大内義長と陶氏の殘党勢力が支配していた防長両国を侵攻するため、岩国の永興寺に陣を移してから一年五ヶ月後のことである。

毛利軍は、弘治二年（一五五六）三月には、一応須々万沼城以東の地、防州山代の侵攻には成功していた。

しかし、大沢を帯びて要害でもあった須々万沼城は、弘治二年（一五五六）四月二〇日、二二日（隆元）および九月二二日（隆元）の攻撃にもよく耐え落城しな

かった。

ところが元就の出陣により、要害といわれた須々万沼城はわずか四日間間の攻撃により、弘治三年（一五五七）三月三日に落城した。

こうした史実を踏まえた上での本稿の課題は、元就が須々万沼城攻略のために用意したと考えられる調略活動とその成果および鉄砲使用の可能性の解明を主とするものである。

一、元就の須々万沼城攻略の自信と調略

元就は、須々万沼城攻略のための出陣時には、五日以内の攻撃で須々万沼城を制圧しようと確信していた

と考えられる。

このことは、『秋藩閩閩録』(八十四)に収められている次の史料で確認できる。

(史料1)<sup>④</sup>

書状披見候、此口之儀、明日二日吉日之間寄

詰陣候、五日之内可仕崩候間、少<sup>茂</sup> 心遣有間

敷候く

一 略

一 多しやうの事申處早々尋越候、祝着候、猶

以相尋追々可給候く

一 略

(史料1)

三月朔日

元就 御判

「児玉若狭守殿

元就」

(史料1)は、元就が須々万沼城を攻撃のため須々万表に布陣中に家臣の児玉就秋に与えた書状と考えられ、「五日之内可仕崩候間」と短期間に須々万沼城を制圧するという自信を示している。

元就のこの自信は、元就の合戦には必ずともなつて

いた調略活動の実施とその成果に十分な確信をもつことができ、また、戦術的には要害須々万沼城の最大の防衛力であった大沢を手編竹および薦を泥中になげうって制圧する戦法の考案<sup>⑤</sup>と新兵器鉄砲の使用が可能となったことに基づくものと考えられる。

元就の出陣による須々万沼城攻撃において調略活動が行われたことは、その一端を『新裁軍記』に収められている次の史料で見出すことができる。

(史料2)<sup>⑥</sup>

(上略) 誠江彈事須々間ニ籠候て涯分こらへたて

仕候を、御方乃兵いか程の調略御たんそくにてこ

そ被練調候は、手こわき敵城を輒落去させられ候、

左候て江彈事其以前之儀は乍勿論、敵之事候間此

方之ためわるきやうにも練候へ、(下略)

元就の得意とする調略活動は、須々万沼城合戦でもかなりな成果を上げていて、恐らく沼城包圍網は完成されていたのではなからうか。

そのような情勢を推定させる史料として、須々万八

幡に元就・隆元が発給したという「毛利元就・隆元連書の寄進状」が現存する。

(史料3)

須々万八幡為造宮領

五貫文之地令寄進候拜符夏之

武運長久所也、仍状如

件

弘治三年卯月廿二日

本註 隆元(花押)  
本註 元就(花押)

須々万八幡御宝前

(史料3)の日付弘治三年四月廿二日には、毛利元就・隆元父子は、防府天満宮大專坊に在陣中であり、「四月二十二日夜、元就は正頼をはじめ防長経略に功労のあった部将達を大專坊に招待して慰勞アハレ」会を開いている。

この宴席で須々万八幡は、防長経略、特に須々万沼城攻撃での功績が認められ、五貫文⑧の地の寄進を受けたのではないだろうか。この史料から、須々万沼城合

戦時における元就の調略活動の成果の一端を窺うことができる。

## 二、鉄砲の使用

日本列島への鉄砲の伝来は、通説では天文一二年(一五四三)大隅種子島に漂着したポルトガル人が初めて二挺の火繩銃をもたらしたことになる⑨。この鉄砲の伝来は、日本科学文化史上画期的な事件であるとともに、当代の政治社会上にも一大波紋をまきおこした⑩。

鉄砲は、急速に日本列島に普及していき、鉄砲が伝来してから三、四年後の天文一五年(一五四六)当時、九州方面ではすでにある程度、鉄砲が使用されていたことが、ゴアの聖パウロ学院の院長ニコラオリランチロットにより書かれた「第二日本情報」(一五四八)に記されている。また同書には、天文一五年(一五四六)当時すでに火薬材料として中国から硝石が輸入されていたことが記されている。これはすでに当時、鉄

砲の製造と使用がある程度すすんでいたことを示す証  
左とみなしうるのではなからうか。

ポルトガル人旅行者ピントは、著書『遍歴記』に伝  
来後わずか一二、三年後の弘治二年（一五五六）に、  
日本列島には三〇万挺の鉄砲があったと記している。<sup>⑩</sup>

毛利氏による鉄砲の使用を示す確実な史料の初見は、  
すでに指摘されているように、（史料一）で示した元  
就が家臣の児玉就秋に与えた書状にある「ゑんしやう」  
の調達命令と、『萩藩閥閥録』（百三十四）に収めら  
れている弘治三年（一五五七）二月一九日の小早川隆  
景書状である。この書状は、隆景が乃美元信に須々万  
沼城攻撃に使用する「鉄放」のために所持する鉛を分  
けてほしいと依頼したものである。

（史料4）

今程なまり所持之由候間、給候者可為祝着候、鉄  
放之ため候間、須々磨せめの御合力たるべく候、

かしく

（五五）

二月十九日

隆景 判

（乃美元信）

万寿殿

まいる

隆景

元就が、須々万沼城攻撃時に鉄砲を使用したことに  
ついては、「卿が戦前鉄砲と鉛とを準備せしめられた  
ことは明らかであるが、それが果たして沼城の攻撃に  
間に合ったか何うか頗る疑問である」とする見解と、  
「浦家証文ニヨレハ此戦、鳥銃ヲ用ユトミエタリ」と  
する見解が対立している。

以下本章においては、当時の日本列島における鉄砲  
の普及状況を具体的な事項ごとに検討し、須々万沼城  
合戦における鉄砲使用の可能性を解明したいと思う。

#### (1) 鉄砲の合戦使用

日本列島における鉄砲の急速な普及を示す事例とし  
て須々万沼城戦開戦時、すなわち弘治三年（一五五七）  
以前における合戦時の鉄砲使用についてみていきたい。

その初見は、鉄砲伝来四年後の天文一六年（一五四  
七）九月三日、織田信秀が美濃稲葉山の斎藤道三を攻  
めたときである。その記録は、『武功夜話』に「日根  
野備中相固め堅固に候なり。寄手は弓・鉄砲を盛んに

うちこみ、堀際に寄付候ところ云々」とある。

その後、西日本では天文一八年（一五四九）三月に端を發した島津忠良・貴久と肝付氏・渋谷氏・蒲生氏との黒川崎合戦で、「日日飛羽箭、發鉄砲、經數月、驚人之耳目」という銃撃戦が行われている。この合戦で鉄砲を使ったのは、肝付氏であり、島津氏の鉄砲使用の初見は、天文二三年（一五五四）九月に島津貴久の弟忠将が脇元で使用したときである。

天文一九年（一五五〇）七月一四日のことであるが、阿波を本拠とする三好長慶軍と將軍義輝・管領晴元軍が、京都市内で足輕一〇〇人ばかりを使って小競り合いを演じた。そのとき、長慶側の三好弓介配下の「弓介の与力一人」が弾丸に当って戦死した。この与力が、記録上では最初に鉄砲で撃たれた日本人である。

天文二四年（一五五五）正月二四日織田信長は、今川方の村木砦を攻撃したとき、自ら鉄砲を取り替え取り替え撃ち放った。このことを、『信長公記』には、「信長堀端に御座候て、鉄炮にて、狭間三ツ御請取り

の由仰せられ、鉄炮取りかへ取りかへ放させられ云々」と記している。

天文二四年（一五五五）の夏の第二回目の川中島合戦で武田信玄は、旭城要害にたてこもった善光寺の堂主栗田氏に合力の鉄砲三〇〇挺を送ったという。甲斐武田氏の鉄砲に関する早い時期の史料と称してよい『妙法寺記』には、「武田殿は三十里此方成、大塚に御陣を成され、善光寺の堂主栗田殿は旭の城に御座候、旭の要害へも、武田晴信公人数三千人、弓を八百張、鉄砲を三百挺から御入候云々」と記してある。

西日本では、天文二四年（一五五五）九月に陶軍の三浦房清が、厳島宮ノ城を攻撃したとき、鉄砲六・七挺を使った。このときの状況を、『陰徳記』は次のように、「其後ハ寄手敢テ近付コトヲ不得ケレハ、サシモノ三浦モ少責飽ンテソ見エニケル。シカハアレトモ三浦カ手ニ鉄砲六七挺有ケルヲ頻ニ打懸ケルソ、城中ノ兵トモモ楯モタマラス鎧モカケズ徹リケル間、防キ兼テ居タリケル」と記している。

弘治年間に入ると、弘治二年（一五五六）八月二〇日の稻生合戦に、織田信長の家臣である佐々成政の鉄砲隊が参加している。その合戦は、大雨の中で行われ『武功夜話』には、「火繩濡れて鉄炮用をなさず」とある。

鉄砲伝来後一二年後に当るが、この史料は既に織田氏では鉄砲足軽が編成されていたことを窺わせる。

天文も末になると、織田氏にみるように鉄砲は、相当大規模に合戦に用いられるにいたったと考えられる。

## (2) 鉄砲の普及と生産

鉄砲の日本列島における普及は、従来の通説としては『鉄砲記』に「この時において、紀州根来寺の杉坊某公という者あり、千里を遠しとせずして、わが鉄砲を求めんと欲す」「その後、和泉堺に橋屋又三郎という者あり、商客の徒なり、わが嶋に寓居する一、二年にして、鉄砲学びほとんど熟す」と見られるように、種子島から、すぐ紀州や和泉に伝わったとされている。

天文一八年（一五四九）七月以前に管領細川晴元は、

天文五年から一五年の間和泉にあって南島の貿易情報を得やすい立場にあった本能寺の仲介で種子島より鉄砲を入手した。その裏付けとなるのが、天文一九年（一五五〇）七月一四日の上京川端の合戦記録である。京都にはその他、種子島経由とは考えられない伝流経路を経由した鉄砲もかなり早い時期にもたらされている。

室町・戦国時代には、当時の新文化や物の流れと同様に、鉄砲もおおむね西から東へと、だんだんと時間をかけて普及したと考えられる。

室町・戦国時代の新文化や物の流れの終着点であった京都への鉄砲伝流経路の今一つとして守護大名からの献上品がある。

天文二三年（一五五四）正月、当時近江の朽木にいた將軍足利義藤（義輝）に大友義鎮（宗麟）が「南蛮鉄放」を献上した。そのとき、室町幕府の奉行人大館晴光は義鎮（宗麟）に対して次の副状を出した。

(史料5)<sup>23)</sup>

今度、飛鳥井大納言殿、南蛮鉄砲御進上、すなわち、大納言殿御参上有るべきの処、御所労により御息安居院、朽木へ御下向候、披露仕り候処、別して喜び思召さるるとほり、能々相意得申すべき由、仰出され候。すなわち、御内書を成され候。鉄放数多御座候へども、只今御進上無類に候。一段御気色に相叶ひ、御秘蔵大方の儀に非ず候。猶、勝光寺御申旨あるべし。御意をうべく候。

恐々謹言

大館 左衛門佐晴光 (菴)

天文二十三年  
正月十九日  
謹上 大友五郎殿

(史料5) から分かるように天文二三年頃には、將軍は手元に多数の鉄砲を所持していて、しかも当時すでにかなり高性能の鉄砲が日本列島に伝流していたか、または製造されていたと考えられる。

毛利氏の場合、織田氏などに比すれば、天文末年か弘治年間の段階における鉄砲使用はあまり活発とはい

えない。しかし、須々万沼城攻撃までに毛利氏が鉄砲を入手していたことは確実であろう。

毛利氏への鉄砲伝流経路の一つは、陶方(大内氏経由)の押収によると考えられるものである。

交易に熱心であった大内氏は海外との接点を持っていたはずであり、商人や和寇<sup>24)</sup>による博多や赤間関を通じた鉄砲の伝流があったと考えられる。

『大友家文書録』によれば、豊後の大友義鎮(宗麟)は天文二二年(一五五三)・弘治二年(一五五六)・

永祿二年(一五五九)・同三年と数回にわたり將軍足

利義藤(義輝)に鉄砲を献上しているが、そのうち天文二二年と弘治二年のものは「南蛮筒」つまりポルトガル船による輸入品であった<sup>25)</sup>。

当時の大内氏からすれば、大内氏でも直接、博多や赤間関などの経由でポルトガル船による鉄砲の輸入が行われていたと考えてもよいのではなからうか。

また、ポルトガル宣教師による鉄砲伝流経路も考えられる。

フランシスコ・ザビエルが、天文二〇年（一五五二）四月の末頃二度目の山口訪問の際、領主（大内義隆）に贈った品物の中に、「三つの砲身を有する高価な燧石の鉄砲」があったことをルイス・フロイスの『日本史』はつたえている。<sup>26</sup>

天文二〇年頃には、すでに瀬戸内海、海賊船では、火器の使用が一般的であつたらしい。天文二〇年、山口からきたフランシスコ・ザビエルが豊後の府内に入ったとき、同地に停泊中のポルトガル船がはなつた礼砲の轟音が豊後王（大友義鎮）をたいへん驚かせ、王は、「海賊がポルトガル船ヲ襲撃セシモノト思ヒ、事機ニヨリ、ポルトガル船ニ助勢セン」としたという。

この史料は、当時瀬戸内海、海賊（水軍）が、鉄砲を常用していたことを示すものであり、ここに毛利氏のいま一つの有力な鉄砲伝流経路の存在が考えられる。

また、毛利氏に属していた堀立（現在の広島市安佐南区下祇園）を本拠とし、商業・運輸などを営んでいた武士的性格の中世内海商人堀立直正からの鉄砲伝流経

路の存在も考えられる。商人による鉄砲伝流としては、やや時代が下るが、天正年間には尾道の豪商渋谷氏が毛利氏の依頼によって鉄砲や火薬の調達を担当していたことが史料的に確認できる。<sup>27</sup>

ときは戦国のさなかであつたので、諸大名は競って鉄砲を求めたであろうから鉄砲は、紀州根来、泉州堺・江州国友・豊後府内・長州山口・薩州鹿児島・相州小田原などの各地で生産されるにいたつていた。<sup>28</sup>

毛利氏への鉄砲伝流において最も密接な関係にあつたと考えられる大内氏による鉄砲製造についての第一次史料は、残念ながら残っていないようである。しかしながら当時、海外貿易について大内氏と同様の方針なり実績を持っていたと考えられる豊後の大友氏については、鉄砲製造についての史料や伝承が残っている。豊後の大友氏における鉄砲製造の創始はいつか明確には分らないが、大友義鎮（宗麟）が將軍に「豊後銃」を献上した初例年次は、前記の永祿二年（一五五九）である。



これはかならずしも、永禄初年に豊後の大友氏で鉄

砲の製造がはじまったことを示すものではなからう。

豊後の大友氏では、種子島経由のほかにポルトガル人の直伝による鉄砲製造法の確立も考えられ、天文一九年（一五五〇）には鉄砲の生産が開始されたに違いない。これらの状況からすると、大内氏領内でも豊後の大友氏と同様に天文末期には、鉄砲の生産が開始されたのではなからうか。

やや時代は下るが天正年間に毛利氏が、長門の長府より安芸の広島まで鉄砲を輸送させており、その折りに「宿々諸市目代」にだした命令書が現存する。

（史料6）<sup>30</sup>

此鐵砲中つ、五丁、こつゝ十丁ニ傳馬貳疋にて至廣嶋宿々より可送届候、大事之物ニ候条、少茂素こね候ハぬ様可仕事肝要候、不可有緩候、以上

宿々諸市

佐賀五

元 嘉 （花押）

目代へ

（史料6）から天正年間以前には長州で鉄砲が製造されていたことが推定できる。おそらく大内氏領内では、豊後の大友氏同様に天文末期には、古くから著名な梵鐘を鑄造していた国衙鑄物師の技術力でもって鉄砲が生産されていたのではなからうか。<sup>31</sup>

おわりに

本稿では、大沢を帯びた要害であり、難攻不落であった須々万沼城が、毛利元就の出陣により、弘治三年（一五五七）三月三日にわずか四日間の攻撃で落城した要因の内、特に元就の調略活動とその成果および鉄砲使用の可能性について、考察を試みてきた。その結果として、以下の点を指摘した。

(1) 元就の合戦には、必ず調略活動がともなっていたが、須々万沼城攻撃時にも事前に十分な調略活動を行ったと考えられる。そして数日間、須々万沼城を攻略できるとの確信のもとに元就は岩国の永興寺

から須々万表に出陣した。

(2) 鉄砲は、天文一二年（一五四三）八月大隅種子島に伝来したが、その後急速に日本列島に普及した。伝来してから三・四年後には、九州方面では、すでに鉄砲が使用されていたという。合戦で使用した初見は、鉄砲伝来四年後の天文一六年（一五四七）九月三日、織田信秀が美濃稲葉山の斎藤道三を攻めたときである。

弘治三年（一五五七）三月の毛利元就出陣による須々万沼城攻略戦ごろには、鉄砲は中部地方以西の日本列島では、合戦のための普遍的な武器の一つとなっていた。

また、日本列島における鉄砲の普及の急速さや當時の生産状況から考えて、天文から弘治年間の段階では、鉄砲使用はあまり活発ではないとされる毛利氏でも、元就が出陣した須々万沼城攻略戦以前には確実に鉄砲を入手しており、元就出陣の須々万攻略戦では、少なくとも十挺内外の鉄砲が使用されたと

考えられる。

さて、いつもの通り雑な検討に終始してしまっただが、本稿では、難攻不落であった須々万沼城が、元就の出陣により、弘治三年（一五五七）二月末日よりわずか四日間の攻撃で、簡単に落城した要因として従来、必ずしも考慮されていなかった、調略の成果と鉄砲の使用を指摘した。

#### 注

- (1) 『天内兵実録』 卷第十八 列伝第十四 叛逆（マツノ書店、二八頁）
- (2) 『新載軍記』 十卷（弘治二）（マツノ書店、四三〜四四頁）
- (3) 『新載軍記』 十卷（弘治三）（マツノ書店、四四三頁）
- (4) 『萩藩閥録』 八十四 児玉彌七郎（マツノ書店、第二卷 八五七頁）
- (5) 『新載軍記』 十卷（弘治三）（マツノ書店、四四三頁）
- (6) 『新載軍記』 十卷（弘治三）（マツノ書店、四四三〜四四四頁）
- (7) 白杆華臣著 『毛利元就と防府』（防府天満宮、一六〜一七頁）

四月二日には、元就は陶晴賢の旧領三〇石の地を防府天満宮の社領として進納し、天満

富浦陣の礼の気持をを表した。

- (8) 毛利領内の天正年間の貫高制は、戦国期の一貫・五石と異なり、一貫・一石三斗三升二合として換算している。したがって五貫文は、石高にして約七石と思われる。  
(因島市文化財保護委員会編 『毛利藩と因島村上水軍』 四頁)
- 戦国期の貫換算だと五石となる。
- (9) 南浦文之著 『鉄炮記』 鉄砲の伝来については諸説があつて、いまだ結論を得たわけではない。ポルトガルの文獻によれば、天文二年(五四)に種子島に漂着した中国のジャン船に同乗していたポルトガル人三人が、火繩銃をもたらしたことになる。  
(アントニオ・ガルヴァン 『新大陸発見記』 ジョーン・ロドリゲス 『日本教会史』 杉本敷編 『科学史』 山川出版社、二一九頁)
- (10) 杉本敷編 『科学史』 山川出版社、二一九頁
- (11) ビントの示した鉄砲数は、誇張が認められるが、当時日本列島にはかなりの鉄砲が存在していたのは事実であろう。
- (12) 『毛利元就卿伝』 (マツノ書店、二九九頁)
- (13) 『新裁軍記』 十卷 論断 (マツノ書店、四四四頁)
- (14) 前野家文書 『武功後話』 (新人物往來社)
- (15) 『賣久公御譜』 『前編旧記雜記』 卷四八所引
- (16) 三木清著 『薩摩島津氏』 (新人物往來社) 脇元(鹿児島県姶良郡姶良町)
- (17) 『晋継卿記』 上京川端の合戦ともいう。
- (18) 『信長公記』 首巻 (新人物往來社、三九、四〇頁)
- (19) 合力だけのために、この時期に三〇挺の鉄砲を調達して送り届けたか、やや疑問である
- (20) 『隆徳記』 卷廿八 (マツノ書店、上 四八八頁) この史料は、第二次史料であるが、当時の大内氏の鉄砲入手記録よりみて概ね真実とみてよからう。
- (21) 南浦文之著 『鉄炮記』 (思文閣出版 『鉄砲 その伝来と影響』 付録四六三、四六六)
- (22) 『本能寺文書』
- (23) 田北孝編 『編年大友史料』
- (24) 後期和寇の活動は、大永・享祿・天文・弘治・元龜・天正の戦国動乱から統一政権の成立過程にあたる。当時の和寇の構成員は、ほとんど中国人であった。この和寇が鉄砲伝来の主人公であったとする説もある。(中央公論社 『鉄砲伝来』 一五頁)
- (25) 田北孝編 『編年大友史料』
- (26) 松田毅一・川崎桃太郎 『フロイス日本史』 (6 六〇頁)
- (27) クラッセ 『日本西教史』 (上巻の上、二〇七・二〇八頁)
- (28) 秋山伸隆 『戦国大名利氏と鉄炮』 (名著出版 『歴史手帖』 一〇巻七号 五頁)
- (29) 杉本敷編 『科学史』 (山川出版社、一三〇頁)
- (30) 『佐世元嘉書状(折紙)』 (樺木文書)
- (31) 長州国術鑄物師は、著名な梵鐘製造のための高度な鑄造技術を持っていたと考えられる。また、ローカルなものであろうが、当時の刀鍛冶として相当高度な鍛造技術ももっていたと考えられる。ポルトガル初伝銃とされる火繩銃の銃身は鍛造で、火門は鉄製である。